

## 論文要旨

担当教員	矢ヶ崎 香	学籍番号		氏名	倉島 里歩
(論文題名) 進行がんの治療に対する意思決定後の気持ちの揺らぎ・葛藤を抱えるがん患者への支援					
(内容の要旨) 1. 研究の背景 慢性期看護学の実習から進行がん患者が治療に関する意思決定後、その選択が正解だったのかと気持ちが揺らぐことがあると知り、周りの医療者が患者の思いに寄り添い続ける必要性を感じて意思決定支援やACPに注目した。一般にACPは人生会議と称され、人生の最期を決めるための話し合いとされているため終末期のイメージを受けるが、終末期に入ってからACPを開始しても十分に話し合いができないことがあり、より早い段階から介入の必要があると考え、具体的な支援方法について研究を開始した。 2. 研究目的 進行がんの治療に関する意思決定後に生じる気持ちの揺らぎや不安、葛藤に対する継続的な支援について、早期介入や具体的な支援をがん看護専門看護師(CNS)がどのように行っているのか明らかにする。 3. 研究方法 関東近郊の大学病院に勤めるCNS1名を対象に半構造化面接とテーマ分析による質的研究を行った。 4. 結果 進行がんを抱える患者に対して、意思決定に関する早期支援として【病気における理解度や不安を聴取】【患者の価値や信念を把握し尊重】【患者の意思の共有】【より良いケアのための多職種協働】【予測しながら患者のペースに合わせて段階的に介入】【生き方を考えるきっかけとしてACPを実施】【時期にこだわらない苦痛に応じた緩和ケアの導入】の7つのテーマが得られた。 5. 考察 進行がんの治療に関する意思決定後に生じる気持ちの揺らぎや不安、葛藤に対する支援としてACPが有効である。より早期から日常的な関わりの中で患者らしさを理解していくACPと患者にとって要となるタイミングで実施する形式的なACPを合わせて実施することで、より患者の本質を捉えることができる。そのためには、患者のペースを優先することや緩和的アプローチによる苦痛の除去が必要である。また、ACPを意思共有の場とするだけでなく、将来について考えるきっかけとすることで、患者が自身の考えについて時間をかけて整理することができ、患者自らが意思決定を行い、本心をケアに反映することが可能となる。また、患者の考えは変わることを前提に、ACPは繰り返し実施していくことが大切である。そして、ACPによって得られた患者の意思を尊重しできるだけ希望に添えるように、一緒に考えたり話し合ったりすることで患者にとって良き理解者・伴走者のような存在になり、精神的な支援につながるのではないかと考える。					

担当教員	堀口 崇	学籍番号		氏名	津幡 芽衣
(論文題名)					
<p>腹膜解剖に着目した腹腔内臓器の空間的位置関係を可視化する解剖学習教材の自主制作と学習プロセスの検討</p>					
<p>【研究の動機と目的】三年次の急性期病態学の講義で供覧された手術動画を見ても、どの臓器のどの部位を、どんな目的で操作しているのか、が理解できなかった。加えて、急性期看護演習で胃がん術後の看護における腹腔ドレーンについて考える際に、留置場所、挿入目的、腹腔内の走行経路、ドレーンの観察ポイント、などが十分に理解できていなかった。これらの経験から、急性期看護に関心があった私は、本プロジェクトを選択し、腹腔内臓器と腹膜の空間的位置関係を視覚的に理解できる学習教材を作成しながら、腹腔内臓器と腹膜に関する臨床解剖の学習法と看護への応用について以下の3項目について検討を行った。①学習教材の作成に必要な解剖学的知識を検証 ②学習過程を記録しながら自身のマイルストーンを検証 ③臨床や教育の場におけるモデルの活用法の検討【方法】成書および論文の精読と、タブレット端末上で立体解剖を学べるアプリケーションを利用した腹腔内臓器と腹膜の解剖学的基本知識の収集を行った上で、腹腔内の解剖見学を行った。これらの知識に基づき、腹腔内臓器の解剖構築を再現できるモデルの作成を行った。また、モデル作成の過程で、自身の腹腔内解剖に関する知識がどの様に変化し、その成長によって、三年次に理解が困難だった術式やドレーンの看護に対する理解度がどの様に変化したかを検証した。【結果と考察】二次元のバージョンⅠ、三次元だが隣接臓器の位置関係が不正確なバージョンⅡを経て、腹腔内臓器の立体的位置関係と腹膜解剖を表現したバージョンⅢを制作した。複雑な腹腔内臓器の解剖も、段階的に積算しながらモデルの修正作業を行うことで、二次元から三次元に変換することができた。腹膜と臓器の関係が立体的に把握できたことで、ドレーンの留置箇所や、体外に至るまでの走行経路も理解ができた。隣接しあう臓器の立体的位置関係と腹膜の関係を把握することは、術式の理解に有用であった。特に、臓器形状と腹膜の学習には発生学に基づく「臓器形状」と「腹膜の連続性」を理解し「矢状・冠状・軸位の一致」が必要であった。学習過程のマイルストーンとして「矢状・冠状・軸位の段階的積算」、「視覚情報のインプットとアウトプット」、「試行錯誤と修正作業」の3点が挙げられた。これらの経験をもとに、①イラスト活用②二次元から三次元への段階的理解③模型作成④修正記録を省察⑤発生学、の5点を推奨学習法として提案した。これらを時系列で記録し、読み返したり、他人に伝承したりすることは、今後の自分や看護学生にとって有用な指針となると考えた。本モデルは、看護学生の学習のみならず、手術や治療法や看護について患者・家族に説明する際に使用すると、視覚情報を補って、言語のみの情報伝達よりもわかりやすい理解を促す効果が期待できると考えられた。</p>					

## 論文要旨

担当教員	鈴木 美穂	学籍番号		氏名	望月 麻紀
(論文題名) 看護学生のエコー使用が解剖生理の学習意欲に与える効果：無作為化比較試験					
1. 背景・目的 臨床の現場で看護師の職責を果たすには、人体の構造や機能の理解が欠かせない。しかし、獲得すべき解剖生理学の知識量は膨大で、看護師養成課程では目先の定期試験や国家試験の合格が学生の学習目標となり、自律的な学習につながりにくい。解剖生理学の効果的な教授法の開発は長年の課題である。生体内部を可視化するエコー（超音波診断装置）は近年、性能の向上が著しい。非侵襲的で学生でも取り扱えるが、基礎教育には取り入れられていない。本研究の目的は、エコーで生体内部を描出する体験は、看護学生の自ら学ぶ意欲を向上させるかどうかを検証し、新たな解剖生理学の教授法を探求することである。					
2. 方法 A 大学看護系学部2年生で解剖生理学に関わる単位を取得済みで、エコー使用経験がない学生を対象に無作為化比較試験を実施した。同意が得られた11名をブロックランダム化で介入群6名、対照群5名に割り付けた。介入群には一般社団法人次世代看護教育研究所によるエコー使用体験講習を行い、講習前と講習1カ月後に、学習意欲全般および解剖生理学を学ぶ理由に関する自記式アンケート調査を実施した。対照群には講習を行わずに、介入群と同時期に同一の調査を実施し、それぞれの変化量を測定した。学習意欲の測定には、大学生用「自ら学ぶ意欲」測定尺度を用いた（櫻井ら，2009）。この尺度は「知的好奇心」「有能さへの欲求」「積極探求」「深い思考」「独立達成」「面白さと楽しさ」「有能感」の7つの下位尺度（各5項目、得点可能範囲1-5）からなる。介入群には講習直後、ハンズオンの難易度や達成感の自己評価を調査した。本研究は慶應義塾大学看護医療学部研究倫理委員会での実施の承認を得た（許可番号332）。					
3. 結果 自ら学ぶ意欲の下位尺度の変化量も、解剖生理学を学ぶ理由の変化も、2群間に有意な差はなかった。ただし「知的好奇心」「面白さと楽しさ」の平均変化量は、対照群はそれぞれ-0.12(SD=0.33)、-0.24(SD=0.43)でいずれも負の変化だったのに対し、介入群は0.03(SD=0.29)、0.00(SD=0.22)で自ら学ぶ意欲が比較的維持されていた。介入群対象の講習直後アンケート調査でも、ほとんどの協力者が「知的好奇心が満足した」「有能感が増した」と回答していた。また、全協力者が解剖生理学の学習の必要性を認識しており、介入群の解剖生理学を学ぶ理由は「看護に関わることは何でも学びたいから」「看護師には必要だから」といった自律的な学習動機が強まる傾向も見られた。					
4. 考察 エコーの使用以外の影響で「自ら学ぶ意欲」が変化する可能性を考慮し、無作為化比較試験を行ったが、統計的分析に必要なサンプルサイズを確保できなかった。協力者は自律的な学習意欲が高く、天井効果も確認され、プラスの変化を捉えにくかった。講習直後アンケート調査では、内容の理解は総じて良好で達成感も得られ、解剖生理学の学習の必要性も認識されていた。エコーを用いた教育を看護師養成課程に導入することは可能であり、自律的な学習意欲を高める可能性があると考えられる。					
櫻井茂男, 大内晶子, 及川千都子. 自ら学ぶ意欲の測定とプロセスモデルの検討. 筑波大学心理学研究 (38):61-71, 2009.					